

武蔵野日曜聖書講筵

空の鳥

——マタイ伝第6章19～34節——

1969年1月5日

小池辰雄

宝を天に積む 心眼 神か我か 空の鳥を見よ 霊的な法則 自然の恩恵 雀と雲雀の伝説
 鳩は霊鳥 霊的空間を歩く 天的自然に即する 気が付くだけ 在らしめられて在る 御霊の
 翼で動く 大自然に全託 まずキリストを求めよ 瞬間において永遠を生きる もし私が人間
 でないならば

【マタイ6】

19 なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損い、盗人う
 がちて盗むなり。20 なんじら己がために財宝を天に積め、かしこは虫と錆が
 損わず、盗人うがちて盗まぬなり。21 なんじの財宝のある所には、なんじの
 心もあるべし。22 身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あか
 るからん。23 然れど、なんじの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光
 闇ならば、その闇いかばかりぞや。24 人は二人の主に兼事うること能わず、
 或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべけれ
 ばなり。汝ら神と富とに兼事うること能わず。25 この故に我なんじらに告ぐ、
 何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い
 煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。26 空の鳥を見よ、播かず、
 刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之
 よりも遙に優るる者ならずや。27 汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加
 え得んや。28 又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つ
 かを思え、勞せず、紡がざるなり。29 然れど我なんじらに告ぐ、榮華を極め
 たるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。30 今日ありて明日、
 炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、あ
 あ信仰うすき者よ。31 さらば何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。
 32 是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝ら
 に必要なるを知り給うなり。33 まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡て
 これらの物は汝らに加えられるべし。34 この故に明日のことを思い煩うな、明
 日は明日みずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。



●宝を天に積む

この次の集会から旧約聖書のイザヤ書を連続に、どれ位の時間がかかるか分かりませんが、いたすつもりです。今日は、年頭の第一回であるので別な内容にいたしました。今年は十千十二支の酉とらの年というわけで、鳥にちなんだお話をしたいと思つて、マタイ伝6章19節から34節を選んだわけです。

19 なんじら己がために財宝たからを地に積むな、ここは虫と錆さびとが損い、盗人ぬすびとうがちて盗むなり。

人間の考える宝、地の宝は財であつて、いわゆるお金のことが中心になるようです。なにも貯蓄や貯金することがわるいことではないのですが、それが目的となり、それが支配するような事態、即ち自分が財のとりこになるような事態は、

「宝を地に積む」

ことは全然まちがいである。大いに財がある人はその財をもちろん善用すれば結構なことなので、その善用をすることが実は、宝を地に積むことではなくて、

「宝を天に積む」

ことになる。事柄は対象いかんではなくして、その対象をどのように使うか。それに対する態度がどうであるかで、宝を地に積むか、宝を天に積むかということになるわけです。パウロが、

「有れども無きがごとく、無けれども有るがごとし。一切の秘訣を得たり」

と言うのは、そういう、宝を本当に天に積むという角度で一切のものに対する。これが「宝を天に積む」ということ。対象が、それ自体が善いのも悪いのでもない。そういった根本的な自覚が大事だと思います。即ち、自分の存在そのものが神の栄光のために動いていることが「宝を天に積む」ということです。

20 なんじら己がために財宝を天に積め、

もちろんこの「己がために」というのは、自己中心の「己がため」ではない。

「本来の私たちというのは永遠の生命をいただくはずのもの」

なんです。永遠の生命をいただくはずの、その「本来の我」というのが、この「己がため」ということだと思います。

かしこは虫と錆が損わず、盗人うがちて盗まぬなり。21 なんじの財宝のある

所には、なんじの心もあるべし。

即ち、

「いわゆる地的な宝に執着しているならばその心は地に属する。天的な宝に心が向

いているならばその心は天に属する」

と。こういうことでありましょう。



●心眼

²²身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。

これは何といつてもそうですね。私たちの灯火は目である。しかしながら、この目はただ肉眼の目ではない。目の見えない方もあります。けれども、その灯火は目であります。それは心眼、霊眼、心の眼。

「この故に汝の目ただしくば」

ということとは、

「汝の目が単一であるならば」

という字なんです。単一であるということとはただ独眼という、一つ目小僧のことではないので、目が単一に向いている。私たちは両眼がありますけれども、この両眼が一つのことに集中しているのが、二つあつて一つの眼である。そして、この一つのことに集中していることが「単一である」ということで、分裂していかない。ロンドンパリみたいにと右と左を見ているのではない。そういうわけで、単一な目的をもつて、単一な中心をもつて、単一な目的に向かっている。それがこの「目ただしくば」ということ。それならば、全身明るからんと。

²³然れど、なんじの目あしくば、

即ち、分裂しているならば、全身が暗くなる。

全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、

即ち、心眼、霊眼がないならば、

その闇いばかりぞや。

と。

●神か我が

²⁴人は二人の主にかねつか兼事うるること能わず、

「あれもこれも」というわけにはいかない。必ず一つである。

「父は一つ、主は一つ、聖霊は一つ、希望は一つ」

と、みなこの単一であります。単純なものが本当であり、またそれが一番強い。

或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべければなり。

これは分裂状態になつて、終いにはノイローゼになつてしまう。

汝ら神と富にかねつか兼事うるること能わず。

即ち、この世の財に執着するところの富、そういったものと兼ね仕えることができない。もうひとつ言うならば、

「汝らは神と」に兼事うるること能わず」



と言ったら、なお強いと私は思うのです。即ち、

「神か、自己か」

と。自己中心であることが、自分を即ち神とするわけですから。

「己の腹を神とする」

という言葉がありますが、即ち、自己中心であることが財に執らわれることである。

「神か、我か」

と。我を否定してかかるところ、これがもう一切のこの世の偶像とか財に執らわれない事態である。要するに、自分自身が偶像となること、これがサタンの角度です。傲慢の角度にもなる。そこで、

「汝ら神と富とに兼事うること能わず」

という。富そのものが、ただちに悪とか何とかだと思ふことは、これはまちがい。それはちよど人間の肉体そのものが悪だと思ふことがまちがいであると同じように。私たちの賜っているものは善からざるはなし。それをどのような目的で使うか。そこに大きな分かれ目がくるわけです。そうなつてくると結局、

「神を中心としているか、自己を中心としているか。人間を中心としているか、本当に神を中心としているか」

のどちらかになるわけです。これが、

「人は一人の主かねつかに兼事かねつかうること能わず」

ということ。これは非常に大事なことを今、お話したわけです。

●空の鳥を見よ

25 この故に我なんじらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思い煩ひ、

何を著きんと体からだのことを思い煩うな。

文明の世界は、みなこれで私たちが何らかの意味において囚われている。着物のことだとか、あるいは食べ物のことだとか、あるいは住まいのことだとか。この衣食住にとらわれがちな、特に都会の生活はそうですね。現象からいっても、大東京はそういったことを代表しているものは、百貨店というやつ。なにも

「百貨店に行くな」

というわけではありませんけれども、そういったものに囚われることが即ち、「富に仕える」ということになる。

生命は糧かてにまさり、体からだは衣まひに勝まさるならずや。

それは、

「イエスの生きていた原始的な時代はこの言葉でいいでしょうが、この頃はこのイエスの言葉では通用しない」



と、普通、常識的に考えればそうでしょう。けれども、そうじゃない。イエスの言葉はどこまでも本質を言っているもので、ある相対的な現実について

「どうあれ、こうあれ」

と言っているのではない。その相対的現実にかなる本質的な態度をもって対するかというところがこの福音の世界の消息なんです。

²⁶空の鳥を見よ、播^まかず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。

キリストのこのところの、これから読むところは実にくつたくなかない、何とも言えない言葉です。「こういう場合には」とか、そんな条件をキリストは考えない。イエスはいつも、ものを本質的な角度から断言的に仰って、その他のことはもう、

「聞く耳あるものは聞くべし。目あるものは見るべし。行いあるものは行おうべし」というようなことであります。

「空の鳥を見てごらん。何も播かず、刈らず、倉に収めない。然るに汝らの天の父は、これを養いたもう」

と。もちろん、キリストは観察の目をもつて鳥を見ているのではない。イエスの目は、鳥の一番本質的な在り方、自然の世界を見ている。要するに、ここでは鳥をもつて、大自然に対して鳥がどういう在り方をしているか。鳥は何も神さまのことを知ってはいないでしょう。けれども、神の方は、

「二羽の雀^{すずめ}も、御意^{みこころ}なくしては落ちない」

とキリストが言われたように鳥を見ている。

● 霊的な法則

だんだん都会が増えてきまして、終いには東京から大阪まで都会の連続になるだろうとまで言われているくらいです。人間の構成しているところの人為的な社会は、だんだんこの大自然から離れていく様相です。だから、都会の人とはとにかく少なくとも一年に春夏秋冬は自然に接しないという、精神的にも非常に毒であります。自然の中に入ると、

「ああいいなあ」

と何か解放されたような気持になる。ということは、人間は本来、自然と離れてはおかしくなるようにできている。

ドイツの詩人の中で何といつても、大自然を本当に愛し、これと一如のような境地になったのはゲーテさんです。私がなぜ、ゲーテが好きであり、またゲーテというものからいろんなことを学ぶのは、彼の魂がこの「ナトゥーア」「自然」を呼吸している魂であった。ゲーテにとってはどう、自然と神とがグッと二重がさねになっています。

この「自然」という言葉は、



「^{おの}自ずから然り^{しか}」

という素晴らしい言葉だね。「ナトゥーア」というよりか、「自然」という言葉の方が素晴らしい。自ずから然りと。^{みずか}自らではない。「自ずから然り」ということはもう必然です。自然は同時に必然なんです。これは天的必然という。必然の動き方をしている。

必然ということは法則の世界です。「法」というと、何か人を縛るように思うけれども、本来、法というものは自然、必然であるということ。この自覚は非常に大事です。人間の作りたいいわゆる規約というようなものとは違う。人為的な規約の法と——仏教の方でも「仏法僧」というでしょ。仏法の法、「ダルマ」——ダルマという法の世界。要するに、一流の人物はみなこの自然、法というものに乗っている人たちです。その法がもちろん、申し上げているとおりの靈法であります。靈的な法則です。この自然の在り方。

●自然の恩恵

このツツジは今頃咲いてしまった。こないだから暖かかったものだから狂い咲きというのだけれども、しかし、狂っているといったって、暖かくなったものだから自然の法則に従って咲いてしまった。枝振りにしたところで、人間がたわめて、いわゆる盆栽式にやつてもわるくはないけれども、あの盆栽も何とかして自然に真似ようとしてやっている。人為のよきを出そうとしているのではなからうと私は思う。盆栽の一番の極致は、盆栽において自然を出そうとしているのだらうと思う。その意味においては、盆栽というものもやっているのだけれども、どこまでも自然に逆らって人為的に作らうというのは邪道だと思う。

「ああ、自然はいいなあ」

と、私たちの心がそういつた自然を自然に喜ぶようなことで、もしないとするならば、どこか狂っているわけです。

「自然を征服する」

なんて、とんでもない傲慢です。自然を利用させていただく。それはわかっている。自然を利用させていただいて、いろいろ自然の恩恵に浴するわけですけれども、「自然を征服する」なんてやってごらんよ。そしたらそのうちに、自然の中にあるところの原子力をもし人為的にとんでもない使い方をしたら、これは人類はお終い。やはり、それは自然の法則に反することになります。自然が持っているあの原子力的なエネルギーを然るべく使うならば、それは素晴らしいことですから。そうでないかぎりには、人を殺そうなんて思っちゃったら、これはとんでもない。人類は自滅してしまう道に行くだけのはなしです。

世の中はだんだん、特に都会生活でもって非常に人為の面が強くなればなるほど、私たちは魂を自然の方に向けて、それと親しんでいないと、特に青年諸君なんていうのはだんだんおかしくなる。そういう意味において、今日の第一回の私たちの集会は非常に大事な一年のあるひとつの性格付けをいただくような気持で私はおります。



●雀と雲雀の伝説

なにも酉年だからどうということでもないのですけれども、日本人の習慣でいうと今年
は酉の年。「酉」というのは妙な字を書くね。私は字引を引いたけれども、なぜこんな字を「と
り」というか分からないそうさ。これは本来、つぼ、瓶かめなんです。瓶の中に水が入ると、「酒」
になる。酒という字は「瓶の中にある水」のことをいう。これははつきりそうです。
それで面白い伝説がある。沖繩の八重山諸島のある島のお話だそうです。雀すずめと雲雀ひばり。そ
の伝説だとそれは兄弟で、雀が兄で雲雀が弟。そのお母さんは神さまに仕えている。「祈女」
という。収穫を祈ったり祝ったりするとき、神さまに捧げた水を村の人たちに分けて与
えるという習慣であった。

「神さまに捧げた水を瓶に入れて持って行きなさい。そして、村人に分けてあげな
さい」

と、弟の雲雀はお父さんに言われて——この雲雀はえらく怠け者だということでしたが—
—しぶしぶ出掛けて行く。道草くいながら行く。野葡萄や木苺があつたりすると、そこで
葡萄を摘んだり、木苺を食べたりしている。瓶を置いて、そんなことをして遊んでいたら、
草むらの中からハブが出てきて、瓶の水を飲んで瓶をひっくり返してしまった。そうしたら、
ハブは皮がむけて若返ってしまった。蛇が一年に一度脱皮するというのはそこからきたと
いう。この水は不思議な水で、若返らせる生命の水である。そういう水を村人に与えれば、
大変、村人が幸いを得るわけですが、ところが、これが無くなってしまった。この雲雀が、
さすがに日も暮れる頃になってそこに戻って来たところが、瓶がひっくり返って水がない。
いやいやしまった。けれども、仕方がない。もう帰ろうと。家に帰って、

「お母さん、村人に水を分けてきましたよ」

なんて、嘘をついてしまった。ところがやがて、それが本当でないことが分かってしまった。
それでお父さんが怒って、斧で雲雀の足を切ってしまった。そこで、雲雀は足が短いとい
うことだそうさ。ところが、それ以来、その村人に病気が起こってきた。病気が起こって
きたし、悪い罪がはびこってきた。要するに、人間はそれ以来——その沖繩のそういつた
お話によると——身体の病と心の病が起きてきた。それはこの神の水、霊水を飲まなくな
ってからだ。こういうお話であります。

私はこの話がある本で読んで、すぐヨハネ伝第4章を思った。即ち、キリストは永遠の
活ける水です。

「私は活ける水を持つている。活水を持つている。この水を飲む者は渴かない。永
遠の生命が、水がその人から湧き出る」

と、サマリヤの女に言いました。

また、雀の方は親孝行で、一生懸命でお父さんお母さんに仕えて、自分を犠牲的にやつ
ていたので、その衣は前はもつときれいだつたそうだが、その犠牲的な精神のために雀は



非常に見栄えのない鳥になった。そしてただ一筋の糸のようなものを首の周りに——沖縄の雀はそうらしい。スーツと白い環があるそうです——その一筋の糸だけが残されて、兄さんの雀はそのようなことであるという。

しかし、このお話はただばかにならないのであつて、神の霊のかかっている水。即ち、キリストの神からいただいた聖霊、

「この水は御霊である」

とヨハネ伝7章に書いてありますが、神の霊である。私たちがこの御霊を、聖霊を失えば、これは心身の病める者であつて、これは死への道である。しかしながら、キリストという、キリストから出ずるところの霊水を飲む者は、聖霊を本当にうちにいただいている者は永遠に生きる。さつきのお話の通りです。まことに面白いことであると思つた。

●鳩は霊鳥

鳥のことで少し聖書に当たつてみると、一番先に思い出すのは創世記8章。これは「ピース」という煙草の箱にちゃんと出ている。あの凶案は創世記8章11節からアメリカの誰かが作つたわけです。ノアの洪水のお話のところ、鳥を放つたところがダメだと。けれども、鳩を放つたら、やがてその鳩が、大洪水が引く時に橄欖の若葉を口にくわえて帰つてきた。それで、洪水は必ず引いて行くという、橄欖の一つの若葉において望みをそこに見た。

「11 鳩暮におよびて彼に還れり。視よ其口に橄欖の新葉ありき。是に於てノア地より水の減少しをしれり」(創世記8・11)

鳩が夕暮れに帰つてきたところが、その口に橄欖の若葉があつたという。これは名画になる一幅の情景ですよ。まさに詩的現実です。これは平和の回復される象徴である。しかもこの鳩は霊鳥です。また、ノアの洪水ではなくしても、世界がどのような審判にあつて、20世紀がどうなるかしらん。

けれども、私たちがこの鳩のような鳥。鳩でもつてすぐ、あなた方も思うことは、キリストの受洗のところ、マタイ伝3章16節あたり、

「16 イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の、鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給う。17 また天より声あり、

曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』(マタイ3・16、17)

と。聖霊が鳩の如くに臨んできた。私はもし人間でなければ、鳥になりたいな、本当に。なにしろいいですよ、鳥は。鳩とか燕とか。鳩はあんな優しいけれども、もの凄く高く上がる。そしてスピードも相当ある。燕にはちよつとかなわなければいけません。

●霊的空間を歩く

どのような事態になりましたも、我々の存在は霊的な空間にある。私たちはこうやって



歩いているけれども、本当に聖霊の人は霊的、空間を歩いている。霊的空間を歩いているものだから、キリストは湖の上を涉ろうと思えば涉ることができた。物理的法則よりも霊的法則の方に乗っかってしまっているひとですから。自然界は神さまのひとつの意志のうち——もちろん霊的な意志です、神の意志は——この霊的な意志によつて自然界は動いている。その外側の法則を見ていると、それは物理法則でありませう。

けれども、その物理法則をもうひとつ霊的法則が時々破ることがある。またそれを導くことがある。モーセの出エジプトの時なんかそうでしょ。パウロがダマスコ途上でひっくり返された時もそうです。

ニュートンの物理学に対してアインシュタインの物理学が出てきたように、それよりももうひとつ次元の違った法則が働く。原子構造、電子の構造、核の構造で陽子と電子、何か中間子なんていうのがあるようで、何かあそこに不思議な、単に物理法則的に考えることのできないような、何か力だかしらんけれども、何か働いて、ああいう構造の微妙なバランスをとらしているようなものらしいけれども。とにかく生命の世界の最後は、物理法則と生命の問題が一番重要な問題に、自然科学の方でもなるのではないかと思えます。

その構造がたとえ説明ができて、説明では結局どうにもならないので、それを私たちが自身が説明を乗り越えた世界を体現していくような、我々の意識の奥の世界でそれが体現されていくような、そういった世界をキリストは持っていた。お釈迦さんは持っていた。そういうようなところに私たち自身も行けるのです。使徒たちも、ペテロ、パウロ、ヨハネあたりもそことにかく連なっていた。我々は神の御霊、キリストの霊と言うときには、その事態が内側から私たちを一切の事態において意識を超えた根源のところから動かすような、そういった在り方です。

これが祈りの世界でキリストと一つになっている。そのときに私たちは霊的空間を生きている。即ち、私たちは地を歩きながら鳥のごときのものであります。鳩のごときのものであります。非常に自在である、自由である。

● 天的自然に即する

自由自在が本当の必然の世界で、自然の世界で、その動きが本当に自然になる。人間の意志の世界は、人間の意志をいわゆる道徳的に意志の世界それ自身を肯定してしまつて——道徳哲学ではそれでいいですよ、けれども——それは結局、実は行き詰まりをきたす現実を持つている。というのは、本当の絶対の世界を持たないところの意志肯定というのは必ず行き詰まる。そういった自由意志なんてものはいくら言ってみたって、それは始まらない。

これがマルティン・ルターとエラスムスの大きな差である。ルターがなぜ「奴隸意志」を言わなければならなかったかという、人間の持ち前の意志は結構なんだけれども、そ



それは結局、自我に囚われるところの意志であるからダメなんだと。大自然に、言い換えるなら、もうひとつ突き抜けて、神に即する。大自然とか神に即する。人為的なものはダメだというわけです。

「自然に帰れ」

とルツソーが言った。あのルツソーの方向はいい。その「自然に帰れ」は私たちにとっては、「キリストに帰れ、神に帰れ」

であります。

自然中の自然、本当の天的自然に即する。

「己を捨てる。自己否定」

とか言いましても、この「即する」ということがなければ、いくら自己否定をやってみても、それはただマイナスそれ自身、空虚それ自身です。本当に即すれば、捨てられていくんです、即しようという角度は。捨ててから即するのではない。捨てられているという事態は、これはもう十字架ではつきりしているんだけれども、十字架をたえ言わないとしても、あのものに即しようとしていく人は自己がだんだん抜けていく。これが悟りの世界です。

●気が付くだけ

闇を見ているのではなくて、いつも光を見ている人は、光に憧れている人は、光のような人にだんだんなっていく。これは悟りや修養の世界で、ある程度いくです。けれども、それを本当にはつきり表しているのは、何といっても、

「もう、その光に向かわざるを得ないような一番の土台を、私はお前たちに与えてある」

と。それが十字架です、贖いというのは。

「完全に、あるがままでもう（自我が完全に）すつ、飛んでいるんだよ」

と。「あるがままですつ飛んでいる」なんていうことは、他の世界では言えない。

「だめそのままがいいよ」

とは、なぜいいかというと、

「既にすつ飛んでいるから。すつ飛んでいるという、自我が完全にすつ、飛ばされていくという事態を与えてあるのだから」

ということ。これに気が付くだけのほなしです。

「ああ、そういう現実にはいたんですか。私は空気の中にいたんですか」というようなものだよね。空気の中にいるくせに、空気を知らないで、

「ああ空気の中にいたんですか」

というようなものだ。私たちはそうなんですよ、本当に。

「キリストの絶対恩寵の中にいたんですか。ああそうでしたか。それでは、聖霊を



吸いましょう」

と、それだけの話なんだ。

「これから少し考えてから。これから聖書を勉強してから。これから少しいいことをしてから」

なんて、そうじゃない。「そこにいた」ということに気が付いて、

「絶対恩寵の中にいる」

ということに気が付いて、そこから力が入ってくる。そこからいくら努力したっていいですよ。その努力はもはや人為的な努力ではないんだから。相対的人間にはいろんな要素がありますから、いいですよどれでも。けれども、

「根底は、何がそれを推進させているか」

ということが問題なんです。

「あの人は努力しているから、信仰は本ものではない」

なんて、そうではない。本もの、世界から、本当の努力が出てくる。その結果がどうであるか、そんなことはいいですよ、人によっていろいろだから。

「相変わらずダメじゃないか」

なんて言つて、人を見ている人はパリサイになる。

「あの人は立派だ」

なんて、今度は人間の善さそうなどころを見ている。それはダメです、かえつてまたダメになる。要するに、いつも見るところのものは、

「その目が単一ならば」

という、

「キリストの事態を本当に受けとつていくならば」

と。そして、その角度から人を見ていけば、その見ることが直ちに祈りになる。その人を審く見方ではないから、その人を救い上げていく見方ですから、見ることが祈りである。聞くことが祈りである。そういうことになる。そのような魂になりましたら、これは本当に楽なことです。

これは良寛禅師の歌だそうだが、

「草に庵いおひに立ちても居ても祈ること我より先に人を渡さん」

自分より先に人を極楽浄土に渡そう、という意味でしょうね。さすがに良寛です。

「我こそは先に」

と言つて、一生懸命で人を押し退けていくのが普通の世界ですが、自分はしんがりとなつて極楽に行きましよう」と。

「我より先に人を渡さん」

と、これが自分の祈りだ、自分の実存であるという。



●在らしめられて在る

「実存」という言葉を私はよく使います。『聖意体現』という本にちよつと詳しい註を付けただけども、哲学的実存と、私が使うこの「実存」とは意味がちがう。私が言う実存というのは、実存の根源は、何と言つても、神さまですから。

「我は有りて在らしめるものなり」

と。自らを投げ出でたるもの。キリストは降臨でしょ。「イグジステンツ」というのは「投げ出る」という意味ですから。自分から外へ、「自分を投げ出してある在り方」を実存という。神さまは、私たちに端倪すべからざる実在です。しかし、天からこの地上に行つて私たちを救う。私たち罪びとをして在らしめている。在らしめている在り方。神さまは霊界にいたもうところの、私たちには絶対に不可知です。不可知なるものが、しかしながら、この私たちを在らしめているということの実証者が、自ら実存して実証した者がキリストです。だから、キリストは実存者であると同時に、神の実証者であるわけです。

投げ出るような在り方が本当に実存という。私たちは自ら実存することはできない。この実存者によつて実存せしめられる。実際に——「実存」なんていう言葉はどうだつていいですよ——在らしめられることによつて、本当に在らしめられて在ることが実存ということですよ。在らしめられて在る。人間は手放してもつて、その信仰や行為がどうであることであるということとは、実存ということではない。

私たちが使う意味は、「実存」というのはどこまでも、

「根源なる者によつて、有りて在らしめられている在り方」

それを実存と申しますので、もしゴタゴタしていらつしやる方があつたら、はつきりとそのように意識していただきたい。だから、自分自身は手放しでは実存でも何でもありません、そんなものは。

キリスト自身がそうだったんだから。

「我何ごとをもなしあたわず」

と言っているんだから。「実存できない」とキリストは言う。

「神さまが私を実存させているんだよ。もう神によらなかつたら、父によらなかつたら、どうにもならない私だよ」

というのがイエスの自覚なんです。イエスなんていうと、何か偉い人かと思つたら、とんでもない。ちつとも偉くない。一番ダメなんだ。自分自身が一番ダメな男がイエスであった。ところが、これが本当にダメに徹して神さまに全託したから、一番凄いことになった。それが無即無限無量という世界です。

なにかクリスチャンがとんでもない間違いをやっているんだよね、

「自分の信仰だとか行為だとか何とかかんとか」

と、なんでそんなことを思っているか。しかし、そういうことになつたら、それが本当に



平伏しの魂なんですよ。平伏しの魂が本当の権威を持っている

今は、私は青年諸君に本当にこれを知ってもらいたいんだよな。時々、年賀状で

「先生に一年間、ドイツ語の時間にいろいろ宗教のことを承って、非常に私は感謝しています」

なんてのが時々やってくる。そういうのにはやはりちよつと返事を書いてやりたくなる。とにかく、私は学校にいる限り、これはもう徹底的に語っていきます。ちつとも水を割らずに語っていきます。今は一番、宗教心が欠けているんだから。

「本来、万人は宗教人であるのに、なぜそのことを自覚しないか」ということです。

●御霊の翼で動く

それが鳥のうちの鳥、鳩。雅歌書なんかみると、

「あなたの目は鳩の如し」

なんてある。あれはちよつと別な意味だけでも。非常にかわいいものだから。「鳥」の字は形からきたらしいね。

酉年の酉は、大体、年賀状に鶏にわとりの絵が書いてある。年賀状にこういうのがあった。

「鶏は暁あかつきを司つかさどり、犬は夜を守り、蜂は蜜を醸かし、人は学ばざれば器ならず」

と。これはお経の文句だそうです。「鶏は暁を司り」という。鶏鳴という。だから、皆さんは今年は大いに早起きしてくださいよ、酉年なんだから。寝坊したら鶏に負けてしまう。

「犬は夜を守り、蜂は蜜を醸し、人は学ばざれば器ならず」

という。運動ばかりしてはダメだ。学ばざれば器とならない。「学生」というのは、学んで生きる者を学生という。学ばないで動いてばかりいる(笑)。これはいかん。動くのは、学んで生きたことが完成してからだ。

「早起きは三文の徳」

なんていう諺もある。私は歳だから大体早く目が覚めます。なにも若い方は無理することはないけれども、時には本当に暁に深く祈ることは非常に大事なことですから。

鳥については、鳥だとか、鶴だとか、いろいろ旧約聖書に出てくるから、そんなものを当たってもいいけれども、それは二義的なことだからよしとしましょう。

要するに、この鳩をもつて、この霊鳥をもつて代表されるところの事態が、いかに私たちが霊的スピリチュアル空間スペースを行くものであるか。即ち、鳩の如く自在に自然の風に向かつて、霊風スピリットに乗って動くのが私たちの本当に御霊の翼で動く在り方である。その意味において、酉の年を私たちは聖書的に自覚したら非常にいいと思います。



●大自然に全託

大自然にそのように自分を全託している鳥の在り方は、

26空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優る者ならずや。27汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。28又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、労せず、紡がざるなり。29然れど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。

キリストの言葉はなんと素晴らしい、おもいきった言葉であるか。また本当に詩的な表現でありながら、根源現実を穿っている言葉であるか。

「では、何もしないでいいのか」
と、そういうことをキリストは言っているのではない。自然の法則に、本当に靈法に従えば、その在り方はまた一番素晴らしい働きをする人なんです。人為的な働き以上に、この靈法に乗っかって動いている人は本当の働きができ、本当の業ができる。こういうことです。そういう事態をとらえていかななくては。

「狐は穴あり、空の鳥は罅あり」
と。時も、これも衣食住の住の方だが、そのように神さまは備えておられると。

「人の子は枕する処なし」
とキリストは言いましたが、枕する処のないキリストは、けれども、彼は至る処を枕にした。これが自在な歩き方です。

30今日ありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、こうやって花を切っては差しても、やがてしおれてしまう。しかしながら、そのような花をも惜しみなく神は実に妙にこれを造っていらつしやる。

まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。31さらば何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。32是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。

「神知り給う。神計り給う」
と。このことの、その「神」は、どこまでも「汝」と響いてこなければダメですよ、三人称では。

「汝知り給う。汝計り給う」
と。私たちは、聖書を読むときに、決して对象的に読んではダメです、三人称的では。もう言葉はどんなに文法的に三人称であっても、これは一人称、二人称になつていかななくては、読むとは、

「読む者は読むべし」



とキリストは言うかもしれない。読むとはそういうことです。

●まずキリストを求めよ

³³まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし。

「一体、神の国とは何ですか。神の義とは何ですか」

なんて、すぐ言い出す。神の国を現象している者は誰ですか。

「空間的にそこらここらに見えるものは神の国ではない」

とキリストは言った。イエス・キリスト自身が、

「神の国は近づけり」

と言った。

「自分が来たから、神の国は近づいて来たんだよ。私と一緒に神の国はそこに現象しているんだよ」

と。だから、キリストを受けとらないで、なにが神の国が分かりますか。「神の国」というのは即ち、

「神の支配するところ」

という意味ですよ。神の支配し給うところ。イエス・キリストは正に神に支配されているひとです。神がキリストにおいて支配しているのだから。キリストは即ち、神の国の最高のまた最深の現象体である。同時に神の義のまた体現者である。

「汝の義をなさせたまえ」

と。自分を投げ捨てているこの在り方が「神の義」がなっている在り方です。

「神の義は福音のうちに表れた」

と。喜びのおとずれ。こないだクリスマスに私は

「大歓喜」

と題していたしました。キリストは大歓喜の実存ですから。この大歓喜そのもの、神の国そのもの、神の義そのものは結局、キリストです。ちっとも難しくくない。

「まずキリストを求めよ」

ことです、

「神の国と神の義を求めよ」

とは。どうぞ、観念的な把握の仕方をなさらないように。

「まずキリストを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えられるべし」

「然り、アーメン」

と。



●瞬間において永遠を生きる

³⁴この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり。

内村先生が自分の日記のことを『一日一生』と書いた。即ち、

「二日を一生として歩こうではないか。今日一日を本ものに生きたらあととはもうどうでもいいよ」

と。問題はどこまでも量ではなくて、人生は質にある。百年いい加減に生きるよりも、一年を本ものに生きた方がその人は永遠をつかんでいる人である。永遠の人である。

「永遠の瞬間」

といます。私たちはこの瞬間を、キリストを生きている人は、瞬間において永遠を生きている人である。永遠を持つている人である。永遠は時間のただ長さではない。

そうしたら、まあなんと気持の豊かな人になるでしょうね。自分が何もものもなくなってしまうたら、本当に豊かになる。なんとも言えませんですよ、これね。

「キリストと一つになってしまっているから、自分はどんなに人にダメに思われたってしょうがないね」

と。その「しょうがないね」というような人にみんななってくださいよ。

「どう思われたって、どう言われたっていいよ、私はもうこのキリストと離れるわけにいかない」

と。聖霊は本当にこのことを私たちに実証させる。でありますので、もう「その日暮らし」です。

「江戸っ子は宵越しの金は使わない」

とかいう。とにかく、その日暮らしでもっていく。貯金したっていいですよ。けれども、そんなふうにごだわりなさるなという話です。私は本ばかり買っていたからかえって——そんなことはどうでもいいけれど——貯金したら戦争でダメになってしまった、貯金がね。けれども、本を買っていたから、今度は本の方がずっと値段が出てきて、困った時に本を売って生きていたことがある。

とにかく、もう一切の、どういう在り方であろうと、根源は枝葉の現象がどうこうということを詮索することではない。内村先生の無教会というのは禁酒禁煙で実にそれは厳しいです——お酒を飲んだって、煙草を吸ったっていいですよ、ただ集会中はよしてもらわなくてもね。

「それでは、集会がすんだらすぐウイスキーを飲もうか」

なんて、そうじゃない(笑)——それはまた福音を律法にしているんだ。とにかく、「ああ、あの人の在り方は自然だ。ちつともそれにのまれていないな」と。



●もし私が人間でないならば

今日は鳥からお酒の話になってしまっただけでも。瓶の中の水は酒なりと。これは霊水ですから、まちがわないうでください。とにかく、ちっとも私はこだわっていませんから。神さまの法則に従っていれば、それで一番いいようにだんだんなってくるから、何ということはない。キリストだって、

「酒を好む者、食を食する者」

なんて悪口言われた。しかし、いくらキリストは葡萄酒を飲んだって、決して飲まれやしない。また、婚宴の葡萄酒がなくなってしまうたら、キリストは水を葡萄酒に変えてしまった。全く自在なひとです。

「これは我が血なり」

と言って、最後の晩餐で葡萄酒を飲ませた。みなこれは象徴ですからね。象徴におけるところの霊的現実をつかまえるかどうかという問題です。

これがマタイ伝の、このキリストの山上の垂訓、山上の告白、教えならざる教え。なんとイエスの言葉は自然ではないか。なんとくつたくがない言葉ではないか。神の自然の中に入っているひとが大自然以上の自然である。

我々都会人はいくら都会のまん中においても、

「ああこれは本当に自然なひとだ」

と。ただ都会を逃げることではない。都会の中にながら、その自然を本当にうちに持つて、人為的なものを支配していくような。とにかく、外側の運命環境が

「どうでなければダメだ」

というのでは本ものの世界ではない。本ものの世界は、どんな運命環境であつても、それを支配していくところの事態。これは霊的空間を動いているような魂にならなければダメです。これははつきりしている。

そういうことでありまして、この鳥のごとく。鳥と言ったら、私たちはその霊的な翼を持つた、霊的空間を歩いているような、そういう実存を自分に自覚して行こう。だからやはり、「もし、私が人間でないならば、鳥でありたいな」

という気持が起きてくるのもそういうわけです。ではおしまい。

